八代集抄

金紫忠之

三十

特別
イ 4
3163
104(30)

金葉和歌集巻第七

恋哥上

五月五日ちしゐてる女乃もとへり
はかりける　　小一条院御製

きうしさわき袖のみぬれてあやめ草
わるこひちにおひんものとも

女乃もとよりはかりける

大江公資朝臣

きのすきさうえなかよすりく笹の
いりぬるよせをひとりなりきなん

恋哥上一本恋上

きうしさわき袖のみ
こひちハ泥（コヒヂ）の字なり
恋路りうつく毎
ぬまにて只ぬ袖の
みぬれてく切る恋
ぜんとハ不知さりと
の恋をあやめよ添て
きのすきさうえなかよ
序哥とさうふの

いとひとけくあひ
きうんハ茂の頭なる
へし
されともこゝ守よ
夜をすり惜しき
こひなふりても花さ
かりもねまハさと
こ恋ひつまて夢のこ
となくされるさや
これにまたおもひハ
草枕ハさひとこえん
枕頭しまておまる
きなひするを孝く
あつてはなくそえ
私といふとはす

暁乃恋と讀る　神祇伯顕仲
さりともとおもふうきよハ世のつれなく
多くとせもふりぬれハあかれぬる
清きあかりぬる女乃ことそり
つかぞりぬる　春宮大夫公実
これにまたておもひをあまきを草枕
とひよかへもにいまむしろぞや
後朝の恋をよめる
ちよかの朝臣
我こひハおかわろ乃清にきてのき

ふやとりうんとく
いろ草とうつくまた
くふひちまさ頭沈
あり草枕様とハ
万葉にいやさて
けりとなは源氏
我恋ハおかわろ乃清乃
腰清乃ハ小山大屋
実とうてう吟歌乃
多撥乃家を伴より
かひかわて蒼き
行つとかて歌乃ひ
公寿を俊教国て棕
の恋孫まて真油
ひとる寿世とちるま

せきやるかうもあくて夢し門
顕季乃家ゆきく人こ恋の音讀
ゝるよめる　藤原顕輔朝臣
何ふとみえて秋乃ひハあかれとも
そのあまき夢ハいのちあかりぬる
女乃ともりはかりける
源雅光
おもふくいおもひよりもす夜門乃
いと初とふかいつときのもや
従二位藤原親子家乃歌合に

事をよそまうてく
よめるなり
何る文をしに　文を
乃出りとて也　伊勢物語
そこにはなる文なり
ことも多き女ともこそ
おもひ川やあるし
ゆ　不ハ行乃　結なり
彼抱ひ小家をさし
てまうてよ此　呉行
ハとよそかゆ　志
いんとてなるや
七夕そ　みこん　船も
心明るやし

おもひ出(イウ)やあるしとよ此れ行を
何やしかりなるゆしところかる
那季の家かく　寄(ヨスル)織女ニ　意といふ
心をよめる　少将公　義母　那季の女　実行少方
七夕そ　みこん　船もこのむしん
何ゆかりも　志しぬ　男をいかません

あるを　此　相風り
序　寄之　清　今　何
やとひひけんとて
乃上　なし　ほるゆや
にハ　意　清　と　袖をぬるを
そと　袖なり　何やも
心なるや
ゆめ　ゆかにあゆとハ
袖りハさしつき　宗
こうハ　何かとも　夢　成
とも　色　とてもとの
心
志しや　乃　袖　何
そ　人　乃　みを　見て

あるを　意といふことをよめる
源師　俊明　臣
あるとも乃　袖かせりさいし　清乃
何やしきまくもぬるし　袖かる
寄　夢　意といふことをよめる
左衛門　実　能
ゆめりにあゆとハ　見てよさもこうハ
うつしりけしきこころなりとも
袖　志しす　中納言　那隆
志しや　乃　かる　山　何を　かけてう

いとゝ心の花ゝ色
といへんとゝ切れ
心海を踏んとゝう
とうつゝく白雲乃
掃ゝて花ゝ色を
所ひらんとゝのむれを
ゝのむれにこゝ来れ
とうつゝくれいとり
ハ綾乃名なれハお
やしとよみつゝけ
ゝかゝのむれにこゝき
ゝれあやしやいかて
所をて立つゝ[illegible]
谷河乃うへハ木のを
うへりハくしきしらく

いとゝこゝろそそしまなりける
中納言俊忠卿乃家にゝのめ
てあそぬ恋といへる心をよめる
源能宣朝臣 中納言国信子 皇后宮権亮

所ひらんとゝのむまにこゝろくれハ名
あやしやいかゝちかへるへき
無恋の心をよめる
中納言実行 公実長八条太政大臣

谷川乃うへハ木のハに埋まてく
下になるるとひとしてゝめや

てたにおりゆこゝろを
けしくよめり
なかむれハこひしき人
心あきしかなり
法しともをろかなる
をろかなるハをろかな
なる之なかさなる心
なかさ乃つゝさなるに
こゝろつゝしなもいそ
なれ也そハいかに法ゝ
うゝめきしかいひ思
せん詞も及ばしとゝ
お中宮賢子の法ゝ事や

月お恋といへるをよめる
菅原基光 修理大夫資忠子 后宮大進

なかむれハこひしき人乃恋しきに
くしきしきれ秋乃よれ月
歌しきしと
法しともをろかなるにもいれなる
いかにらしむと人りしらせん
掃中なる人乃お中宮にまいり
まれハなこりをこひく月乃
所なるまなる長いひ法かりなる

おもかけハ数なるぬ男は
俤を我は忘られて
お中文の四方乃月を
誰とかみてるんとし
あかれかつき事はも

おもかけハ数なるぬ男はこひまして
雨ぬ乃月をこれとみてるんん
さいる事にかかくくしう書つき
乃里なる女乃ことゝかわいひを
くり付なる　読人しらず

あさましやなとかき
蜜乃ことゝかなとかき
くく事ハすきみなり
とりはくらやふかか
きくし久しく書は
里のかぬうとし

あさましやなとかき給ることゝかなり
さこそは何用れすさひなりとも
久ハかりをこせくいひたくすり
なる人乃ことゝかいひたりて

小みうめくおもひ
一度久をうめても
又ふひかりしこと
紅乃色かりるを迅
れとかり此哥れ
愛師徒

しるらめやよりの
源経橋　八宅抄山陳
或説津の国ことゝ
もにといふん枕詞と
遠海もこそ縁と世
とともに雄島人を遠
海をとハ知んや志
しとのゆへ

こひわひくをまゝる

なる　内大臣家小大進
小みうめくおもひかりしかれなのれ
ぬくく乃すさひをいかて見せなん
實行以家乃哥合り　遠乃心をよめ
れ　長實以母
しるらめやよりと乃法さ橋よりとくもに
法きなき人をこひまくるとも
菅原道経
こひわひくをまゝる袖やなれ出る
なみたる乃川れ　ゆせきなるらん

心明之
あかれて乃名なり
人目包子を悦りえ
て隠ら人目小見て去る
まつと包めとも世き
何へぬ洞り絶小名り
立くなるとも洞ほと
いふから悦ぶとよめり
せきし乃しハ助字之
あけて門袖乃ゆせき
をそゆる袖もやくく
朽てしひのとむるなき
あきの心なるへし
かくとこふかまくいえ代
寛代孫松お注まぐ

お將公教母
あかれて乃名なり立ぬるあけて何
人めたし子をせきし何へねを
歌去ると
皇后宮大夫作
あけて門袖乃ゆせきも朽をてく
よとむりてあきこひもするかな
源殿宮親臣
かくとこふかまぐいえ去る乃むすひ松
むすひまくるわかこころ乃郷
女乃ことりはかりしかる

かくとこふかまくいえすと
いひけすと下句ハ略之
こひとてふこしの関
恋すると云ふ事を
いくこひ心つくしり
我ちつ乃とと八代物
門司関猟おこと
いのちこふかたかなかり
心明之
たらかかし心なりはな
日比つるかし人れ
ハさ心なりあひくと
あひまくも猟見
とハかれしぬ心

菅原殿輔朝臣
こひとてふこし乃関もわいくこひ
我かきたしんこころたくしり
左兵衛督實雅
いのちこふかたかなかりとハとしふとも
あひ見んこともまくまし物を
後朝乃心を読る
源行宗朝臣
たらかかし心なりはひりあひ見くを
おを笑りとうこしかれかる
播河院御時乃類出合まよめる

春宮大夫公實

播川院此時歌合
續後撰云哀しむ男女
よすがなさせてく法説
しらるる公実國信をも
よりはじめて後鳥羽をはじめ
人々しきあまたうちすゑしかやりのひろひ女は周防内侍四条宮
筑前一条紀伊ゆりはを肥後ほの美濃とはいふ不ゑ乃女房我も
おもひあまりいそのかみふるあまよすてく男乃かりかりやりをとしてる播磨の
数寄会とて東の母まくとゝまりてよき哥物ゝ撰集をぞ出されるとも
おもひあまりいそのかみふるあまよすてく男乃かりかりやりをとしてる播磨の
てはつさんとの心
年ふれど人もすさめぬ
すさめぬは思ひしとわ
あひぬ世と杯未杜八雲
抄二遊仙窟谷の埋木

おもひあまりいそのかみふるあまよすてく男乃かりかりやりをとしてる播磨の
いそのかみふるあまよすてく男乃かりかりやりをとしてる播磨の
よりはじめて後鳥羽をはじめ
人々しきあまたうちすゑしかやりのひろひ女は周防内侍四条宮
筑前一条紀伊ゆりはを肥後ほの美濃とはいふ不ゑ乃女房我も
おもひあまりいそのかみふるあまよすてく男乃かりかりやりをとしてる播磨の
数寄会とて東の母まくとゝまりてよき哥物ゝ撰集をぞ出されるとも
おもひあまりいそのかみふるあまよすてく男乃かりかりやりをとしてる播磨の
てはつさんとの心
年ふれど人もすさめぬ
すさめぬは思ひしとわ
あひぬ世と杯未杜八雲
抄二遊仙窟谷の埋木

道乃心をよめる　菅原朝臣
年ふれど人もすさめぬわがこひや
くちせぬ乃杜此谷乃むもれ木

はれ人をもとゝあまりて
杯をつくるを年ふるとも
もすさめぬ道を所にて
いかゞせんかすまるぬ男を
やことなく行るもしき人
なれは及はぬるをしぞ
と法こむ和もあまる間
をいかゞせんとて
院乃熊野　白河院寛
治四年正月熊野法華
法皇のたもと元永元年
九月熊野へ御幸をし
ぬもすまゝ男の杖乃
心明し様の事なり古
里遠るといふ詞を付て

行るまゝしき人をおもひわびくよ
める　よすがなしとて
いかゞせんかすまるぬ男をしぞ行て
法こむ和よりおつるなみだを
院乃熊野へまいりまゐりけ
れ時御道にまゐりて様の事乃霧
けりなれは法る大宰大弐長實
ぬもすまゝ男乃まくらをとく霧は
ゆるさどこゝろなるこゝなるらん
道乃心を法る神祇伯顕仲

あうもかくこひちよ
けてかく意味乃わり
なき中に有の文月にて
とまてもちひくうやと
の心を泥池り立てく
萬葉ひくにかつて遠
をの法りしよりて床
うきハ池をのこひ
なり

あうをかくこひちに立てくけやの事
おまりなりひくけつきなるしん
人乃をとりけりしなる
神祇伯邵仲

をの法りしよりて床乃さむしなる
おそさ乃うきうりなると志しすや
そしてといひてへ志く者せぬ人の
をとにいひけりしなる
さかみ

何かふるもうき世なりけりもちろね
ちろね人の心と床と
げぬ心をかくうき人を
教てをふるもうき

何かふるもうき世なりけりもちろね
ちろね人の心と床と
げぬ心をかくうき人を
教てをふるもうき

世なれハもちろね人の心
を我命にしてく短命に
て死まりしきとて
池りすむ我名をそのの
かうらわき人をハしれ
名もかきにおハ無芳
にとりかへて物にもに
さおくハかる情をも
すゑしきにの心なり
古今池に住名をそ
名のみを流す隠れ
すれと隠れなりし又
古家「乃」迄と物にも
かや世中をなしなり
ら此我身とさりんは

ひとりこころをいのちともう郷
人をうしまて法りしなる
菅原雅規

池りすむ我名をそのとりへと
物りもかるや人をうしみし
女乃をとまりかくわなるにとは
いかへりけれハ物にかくるのち
ひとひハいかにとひしまとかれれも
いひましなる
菅原正家朝臣
式ア大脯家經子大大安

秋かせりふきかへされて葛のなかの

二首此歌を聞れよか
秋風に吹へされて
一日鳴りゆつまるう
さいふ不根しとうるひ
まふとゝ菱今秋風乃
吹らう今を葛の葉花
根ても枯うゆきけれ
拾遺にふ不入まき抄
とりハ志るうちの歌
志るらへ男をハ捨ん
何おうちにわかりくか
さるゆ道へ女に恨志てふ
切ハ男ハ捨て思ふおう我
心うしからハねずまに死よ
らんをりの名ハ惜きと

いろよしみすひとうさゑ志る
かつすひ待つるく人のあまちにさ
すゝき乃ほかれれいひはらつける

萩原有数母

志るらへ男を捨てんとしけりを
かくまくとまゝる名に立ちけれ

長實の家の哥合に恋の心を
よめる

藤原忠隆

はかなくもあすさ乃命哉志るれハ
こひする名をもつくしつるかな

法かなくもあすの
頃かずの白ちとられ
と前の日ち志るく
名れい恋する名を惜
まつせよとのすす
いひ哉此題にてよめり
志らきくのかりね
一旦かりねて結
まふうつる恋を第に
うへくよめり
志ま風うち志まと河
鴻風浦風山風の乱
く志きに河ハ廉立
波之寄す恨て
といへん序也心ハ須也

人よかりけて

春宮大夫公実

志らきく乃かりしねさも惜けれと
うつろひゆくやむ秋しなれれを
人をうしそく流れける

萩原雅親

志ま風の志ま河波乃立つかり
うしそくも猶そのすゝまる

あきさむさて人乃をとさま
流ちける

安藝女内侍

はさまやねも志らぬ名れ河

何きましや多逢郷も
名取河陰奥之宮間
とうすハ名のとれ流
るとうへて之多逢郷も
しらねに早く世ゝ名
をとうすへきうすへ
成ましくもなきゝ名
をとうしまつるゝとの
心之ゆちのくにをとゝ
なる名取河なき名
ゑてハ苦しかりけり
ひとよとハいつか契り
一夜多逢てのちふ多逢を
恨む心を河竹の瀬
まくよめり

まくしきまいまゝ田ことしすへしやハ
逢不遇（アフテサルアハ）恋といつるすをよめる
左京大夫經忠（經輔孫 師信長 三位）

ひとよとハいつかちきりし河竹乃
あかれてくとこうなりひうめしの
後忠公乃家にて恋哥十首人
によりて世ゆるにちかひて（イ誓不逢恋）おいすと
いつるすを読る 皇后宮武部

あひしてくのちふ多逢を
恨む心を河竹の瀬
まくよめり

あひしてのちふ
誓不逢とハさうひに
かりハ地獄に落んな
とちかひて後かりて
ふ多逢之逢とて後かく
つゝ何ハ誓詞に違
これハ来世ゆ来世に
も増る恋に出んとこ
こひを地獄の火に焼き
いつとなく恋にこそ
信濃の浅間ハ常に
燃ころ下なれハ
のちの世と契り
恋にハ死なんなとに
がなの世にありんと契

実行ハ乃家の哥合に恋の心を
よめる
源俊頼朝臣

いつとなく恋にこそ我君に
こゝりやあさまれたゝりなるもん
恋の哥とてよめる
菅原成通朝臣

のち乃世と契りし人もなき物を
しるりやとのみいふうもりなき
摂政左大臣

いそぬまハ下そふ芦のねを志れる

こいぬ貝殺乃逃まり
五月雨小さ(ハ)何里ハ花独
何る身此独の国をしひ
やれとて少しもとるし
身此孤の様
こふ事とも人乃心此
心ハあまりかなり心の
とけぬりむとれる
りこそけるを
こころさしあさちの
志聞とうけく
をく寝乃玉とうへ
ゑり心さし聞くして
しあくとふ人をこの
しけりとて

皇后宮まく人こ寝乃哥つかう
まつりかるふ被(ハ)返(カサ)書(フミヲ)寝といふる
ことをよめるけ
ことを　兼澄
こふ事とも人乃こころ乃とけぬまハ
むとをれなりかつる玉流さ
人こま寝乃哥よませ給ふ
人をかりわて　持政在大臣
こころさしあさちの末をとく寝の
しまはりとふ人ハこのまし
世の三日月寝をよめる

よひのまにかのかま
雪のまきれなかの
みとくあそ入く
来ける人を三日月
りうへてよめりし
心を
志のふ事とかひもなき
恨めしさを思ハ無ふ
とすれと無ひらけれ
ハかけくも今ハうしむ
ましきとの心を渚乃
寝小舟波をの孤之
あくもかく身ふかふ
何ふかく身ふかゆるか
こハ世ふんあふを

菅原為忠
よひ乃まにかのかま人をこうほきれ
何うくいまふしかけうこひしき
無寝をよめるよみ人しらと
志のふ事とかひもなきさ乃何まをふね
あけハかけくもいまハうしみ(イとのまし)
雲居寺乃哥合に人をかりわて
(拾芳の花園向祇園南阿弥陀ゑ)
寝の心をよめる　三宮大進
あくもかく身ふかふをかりわ御ふん
何ひかんことも人乃さめかを

あはさめとそ侍れと
乃心
何ゆゑ人乃心す
何ことまうつろひやすき
人の心そ世にハあれし
あるとにハこれなきと
わかこひハかくすへた
齊藤将云敏達天皇元年四月高麗より上り
ける表疏烏の羽に書けり
羽黒くして讀人なし
爰に船史の祖王辰爾
以者則羽を飯の汁にむして帛をもて
羽に押て悉く字

寄花恋の心をよめる　摂政左大臣

何ことし ひとつのこころに くらへきを
そのしときゝ たれによりてこよひれ

百首歌中に恋乃心をよめる　修理大夫顕季

わかこひハかくすへにくにこそのこの
うつゝねかとハ志る人もなし

摂政左大臣家にて恋乃心をよめる　源雅光

何やみしにくるしむ君ある拇を
いつまてかつねさとしきかん

をうつしてよく
よめり委見日本紀廿巻
愚案我恋ハ知人なしと
いへるにそへてよめる哥也
あやしくもこいしむね
胸にこかれて袂ぬれ
あまと何やみて
何も何やみて
わかおもひ
こひわひておもひ
恋侘ておもひ入
つと出る月日と
みしく恋侘て
月日経し心をそ
うらみなからも

寄山恋といへることをよめる　大中臣公長朝臣

こひわひておもひいるさの山のはに
出る月日のつもりぬるかな

藤原公教

難面かる人の心に忍ひかねつる
うらみてもなほかへつるへき
侘しきをゆめとおもひますらん

摂政左大臣家にて寄花恋と

雖かき人のうれいハあかぬてなそのあるきことを見るよそを捜りて雄るききわきと夢すととそりて嫉りんとの心かく風りこぬこ手まゐ風よそることと花よをも同じとめくらとをおもひ草か葉末よ切る青い草と露とよ読わると通具の人はやあるをもくちろきあるをいへとれことし云さりよ給はをる人の紅て言ひるを

いつはりを請る　源雅光
山かぜにかぬこすゑ乃花よりも
とめかたきはあすきものから

権中納言俊忠（イ雄末）家にて恋十首
人々よみ侍りけるにまふ恋といへる
おもひをよめる　源俊頼朝臣
おもひ草葉末にむすぶ白露の
たまたまきてはてにもかかるす
女をとりやかへりかる
春宮大夫公實

うち欲まてよめる心也序寄し何ねたふみのうへとうおもひしを拾遺集に根ありきハうへこと思ひこれ下ハえあるす心とひ須と身もやむ須とまおくるきろわとさ苔衣ハ隙眠のころぬき捨るハされり我身とまつてよめるかくもせすの上も皆の衣れ絶しおもふる袖の上序寄し袖のまゝ

何ねたふみ乃うへとうおもひしを
うきハわか身りはかなるものを
重服なりけるころ人乃恋かりまうてこんとまうされけれハ遣はしける
摂後宗女
よるかへしまくらとなし苔ころも
ぬきすてらまし身をとおもへハ
恋乃心をよめる（かわ）
前中宮上総（安）
おもふる袖乃手まくらしとやくらむ

上まくよわとりひかけくしまくいとよわの四之心ハ明之
このめをくこの葉露ハ葉ゝりかゝる物なれハの人何と我めをくこの葉もなくつゝき物を何かる我舎ハかゝりて清さ我うやと之此歌イ本にハ題出しすと詞出何り

をとりきてこひわたるかな
二条ー 皇后宮女別當 基俊女

このめをくこのはゝ葉もなき物をおもしかゝる露乃いのちかり

金葉和歌集巻第八

慈哥下

初慈乃心をよめる
イ初ゝる慈の心をよめると何りされハ初慈をもちめくるとよむへきかや

かすめてハおもふ心を人ゝ物をもしめてすこしいひ出をかすむるとりて之源氏の紫雲にまことにや花のあるかハ立うきとかすめるを

初慈乃心をよめる
良暹法師

かすめくハおもふこゝろを志るやてまゝ乃うしかもしまゝ世清るかな
公任家にて和歌海橋立慈と三乃題を人ゝよませ侍るに
をうくまゝかて人こそなる程なりなれハ三乃題をひとりに

乃ちきをもしんを
よしもこゝ心と此事
もこゝ心をくく春乃
宮ふまのせくくのか
すむるとの心をも
こひわたる人に見せ
海橋立ハ丹後松ある
所と松の梨れこきを
乃ことかもしたにこゝろ
ゑ侍るを慈鎮の人乃
見せしらせいやとて慈
鎮のも橋立の題と三
題を一首に書かなや
志のくめのあけゆくそ
明ゆくに書くてを

よめるうた　菅原範永朝臣
こひわたる人乃見せいや松乃なかも
志こゝもみちする所まれたしこそ
後鎮慈乃心をよめる
源師俊朝臣
志のくめ乃所けゆくそらを鳴るさハ
あけてくりくるし物ようをくる
月ニ増慈といへることをよめる
内大臣
いとしくおもひけよしこゝろ

對して心明し
いとしくおもひけは
常に伊ハ立といへと
月ふむかひくハいとし
あつりき教形ひ出
らるに付て物も月
見よと契りしもな
きかと常へる心
こひわひてねぬよ
諸く感ゆく人を慈
徳ていくおもひなれ
ハ枕によるもなき
心を枕さへと請くに
くめしる哥なるも
よとしもに袖のうへ

月見よとしをちきしさかしを
慈乃心を　菅原孫補朝臣
こひわひくねぬよほとれハ志きこの
まつらさへこそうとしなりくれ
為相殿乃哥合に慈乃こゝろを
よめる　菅原仲美朝臣
よとしもに袖乃かゝかぬ我こひや
としまのいそりよりする志し波
晩乃慈といへることをよめる
中納言雅定

上二句 寫す秋 摂津也 常に
ぬらしてよふりての後
何かるをころび人
いつ迄へきとふき恋ぬ
恋ハ夕日ふむむのひく
心乃く成ゆく打かし
よめる心ハ七夕附
日ハ夕ハ成けり白し
山乃井の浅き心とうる
恋よやつまてるす
をおのれハ深きてうすよ
よみつけたるそよめ
みちのく乃おのひ
何武於原八尾播磨
と迄とハかりて

わすれじをこよひとおもふ夕ぐれの月
にるやまれともうちつれなし
恋乃心をよめる　右兵衛督伊通
山乃井乃浅き心もおもはぬを影ばかりのみ人の見ゆらん
何さまくしけまもなかにくるゝ
皇后宮にて人々恋の哥つかう
まつりけるによめる
大宰大弐重家
みちのく乃おもひしのぶのおくまでも
こゝろかゝる何の乃まつらん

てし心ハおもひくらべ也
人志れぬこひをつねにするかの
心ハ浮きたるをあまき志
かれとるて明る也
此歌イ本ニなし
おもひとのかし人の
鳴門備河波しらん
とうひかくの人
乃こ時のこゝろ気
何にすなりゆくう
うらめしきをし
くるしきも何くめ
切なる心なり也
かくれなきなし

恋の心をよめる　皇后宮権大夫師時
人志れぬこひをつねにするがなるひとこそ
なきしられくるともなかりけり
あまた乃人々百首哥よみ侍りけるに
恨の心を読る　権僧正永縁
おもはんとたのめし人乃むかしに
何ゝすなるとも乃うらめしきかな
恋の心を読る　弁そてよめるイ　隆源法師
くるしくも何くめなき世の中を
いはでも志のびてこひわたるかな

蓮人家時イ源家時と
あつて淺路守威長子
上野守刑中少輔五位
ひとこころあさ沢の
淺沢の梅は名ばかりや
只淺き沢の乃根芹
ハ拾ふれと摘まれと
いひく心淺き人ハい
くつてきとの心を
比しくよめるなるも
立門（タチキヽテコフ）意イ こゝろきてこふ
とゝるものとよめること
そも立門（タチキヽテコフ）意と可読
わきもこゝろ立門し
唐衣ハこゝろきしとひ

蓮人家時かまくは成るを
根くいひはかりしなる
お中宮越後
ひとこころあさ沢の乃ねせわこう
かるをかわりも流まゝかしなれ
後忠四家ゆく意乃哥十首人々
よみなるは立門（タチキクコヒ）意といふるものを
（タチキヽテコフ）
修理大夫所季
わきもこゝろ立門しかゝ衣
う乃よれ露かり袖ハぬまきなり

てゝ心ハあきくなるも
人しれぬこひをしすゆの
心ハ沒てるをなきしを
かれしとうて明るも
此哥イ本ニなし
おもひんとこのめし人の
鳴門浦何波之しらん
とこゝろひかゝのめし人
乃こそ時のことくなれ
何しすなりゆくら
うらめしきとこ
くるしまも流くめ
切なる心なり心を
かくれてるなし

意の心をよめる　皇后宮權大夫師時
人しれぬこひをしすゆれうらひとそ
なきしをかくれてるとなりなり
なり乃人々百首哥よみなるは
恨の心を張る　擁傍正永縁
おもひんとこのめし人乃むかしなり
何しすなるとあらうめしきなる
意の心を張る（哥とそよめるイ）　隆源法師
くるしまも流くめなき世ハ多きなるを
いけとも生てこひてるなり

荒人家時イ 源家時と
あつて 淡路守 威長子
上野守 刑中少輔 五位
ひとこころあさ沢の
淺沢の 接ほ名ぶるや
只淺き沢の乃根行
ハ拈るれと 摘まれと
いひく心淺き人ハい
くつてきとの心を
此とく よめるなるも
立吟 慈イ こちきてふ
と云るものをよめること
そも 立吟(タチキテコフ) 慈と可読
わきをこゝろ立吟し
唐衣ハこちきしとひ

荒人家時かまくに成るを
恨くいひはかりしける
お中宮越後
ひとこころあさ沢の乃ねせわこう
かるたかりしも法まゝ知しなれ
後忠四家ゆく 慈乃哥十首人に
よみなるに 立吟(タチキク)(コヒ)慈といふるものを
よめる
修理大夫 別季
わきもこゝろ立こちきしかし衣
うの乃よれ寝かり 袖ハぬまなり

てし心ハあきくなるも
人志れぬこひをしすゆの
心ハ沒てるをなき志
かれしとうへて明なるも
此哥イ本ニなし
おもひんとこのめし人の
鳴門浦何波之ゆん
とこうひかこのめし人
乃こそ時のことくなも
何しすなりゆくら
うらめしきとこ
くるしまも法くめ
切なる心なり 世を
かくれてるなし

慈の心をよめる 皇后宮權大夫師時
人志れぬこひをしすゆれうらひとそ
なき志かくれてるとなりなり
なり乃人に百首哥よみなるに
恨の心を読る 擁僧正永縁
おもひんとこのめし人乃むかしにも
何しすなるとなりうらめしきかる
慈の心を読る(哥とそよめるイ) 隆源法師
くるしまも法くめなき世に多きるを
いけとも志してこひてるなり

荒人家時イ源家時と
あり淡路守盛長子
上野守刑部少輔なり
ひとこゝろあさ沢の
浅沢の根はあらはれや
其浅き沢の乃根芹
ハ根あらはれ摘まれと
いひ心浅き人ハいひ
さくつみさとの心を
時くよめる哥也
立聞恋ハよろしき歌ニ
と云うるのとよめるを
又も立聞恋と可讀
わきもこゝろ立聞し
唐衣ハよろしきといひ

荒人家時かれ〳〵に成けるを
恨みていひつかはしける

お中宮越後

いとこゝろあさ沢水乃ねせりこそ
かるゝもかりにしもなかれてもかれ

俊忠の家にて恋乃哥十首人々
よみけるに立聞恋といへる心を
よめる

修理大夫顕季

わきもこかこゑ立きゝしから衣
その夜の露に袖ハぬれにけり

しよわ袖ハぬれにけり
とよんさめと
こともわやなやひかり
闇部山をうつくし
とひくくるまされ
るうきをめつるもこ
とわやしなりし
やうよいひくにたゞ
はる人を知りける
我心こそわるうや
こひわひく諸る空の
下もえの煙ハ思ひ
乃煙とぞ

我をこそかれくよるまてこゝろ人乃
こともなくまのときさてたのかり
なる

よみ人しらす

ことわりやなをもしのふの山さくら
はかなくもまされる花をめつるも

郁芳門院根合に恋乃心をよ
める

周防内侍

こひわひてなかむる空のうき雲や
わか下もえ乃けふりなるらん

人を恨みて五月五日につかはし

あふことのひさしに
行ふすゑくく絶身か
ちなれいかりうめ乃
書そとしひさしのさ
迷をつまといふり
うつくよめり
ほしきをもしひも知ね
わりなきしひは人の
つらさをもしひ出るを
三れしさき中をかく
よめるなりや
さき乃よれ契りを
かくしさき嫌もお

たしなる　お母宮の内
あふことのひさしよふるにやめ量
しらぬかりうめ乃法ほとこうしれ
恋乃心を読る　大宰大武長實
ほしきをもしひも出るね身れ引と
こひしさいりてわすれさるらん
歌出しもと　前歌（中イ）又上総
さき乃よれ契を出しているくも
人を法しとおりひなるかな
恋乃奇よりなる所をよめる

世よりのるすと思ひも出
らて思人のつらさ故と
思ひしよしたるなきす
とのしるなりや
わすれ草出けまる
人の思ひのしかり三
歌なり出けくなると
歌心を形よせる三
草なりてよめり
いまなりハ思ひも出
うらめしといふも恨ば
思ひなをもんと歌を
のかるれとのすと今ハ
歌なきゆるれ迄
おりひきやなひらし

源信教朝臣
わすれ草出けまる者をきくこれを
おりひのきよりおゆるなりなり
人をうらそ（イよめる）　よりて人出しもと
いまなりハおりひもいてしうらめしと
いふもこのみ乃かるなきかう
逢不遇（テルヤ）恋をよめる
左京稽実能
おりひきやなひらしよいのうれしさ
のちれ法しさ乃まさるへしとも

心明し逢不遇恋の
歌をやまとうたよく
いひかなへてまつるまや
何ひとともなるん世にハ
病なりきけどなとう
らめしき人の間もこね
りこへよそやりし心歌
なるまや人かハ人を逢
するすすもおつる洞
里するも洞に洗
りて逢ハ恋しともか
きあへとも
ゑらんてぬ心ひかわハ
あに破れぬ思ひそ思
ひ志つむれと洞を志

人を恨ずなる比心ち例なるす侍
ゑれハよめる　読人志らず
何ひとともなるんよにハ思ひ出よ
わまゆへいのちたしし人をと
女のがわをしなる菅原忠実
するすすもおつるなすてこそ何ひかれく
こひしとこそもえこそかへ逢ね
家乃舞合に初恋を
中納言國信
いろ見てぬこころハかわそ志づむれと

のひかりしとも
何ゆるすハゆめかわせ
逢ハ夢のかとなり
とよし夢かとなりと
を汚やあこうあひ
見しとハ人に語るな
こと夢ハ見る物を
逢ハ見しと語るよ
よめるこそかハ逢
芦の手れ隙なく
席哥に物むつし
くこハ鶴のいしけき
ハむさく志きこすを
いふ恋の知るを恋
をさふ逢とあまる

なすぐこハえこそ志のぞさりそれ
こハ志らず　よみ人志らず
何ゆことハゆめかわまくやすあしを
さこそ見しかと人かりかくるな
大納言經信
芦垣の隙なくかくるくも乃ハ乃
まのむ門りしく志けるわかこひ
菅原忠隆
をさふ逢とハのまるなすハをる山の
なけきにおつる志つくなわそわ

なき山近江に洞ハ漏と
うつくと歎きを本
ふうつく雫と也
いふかせんなけきの
なきなと信る歎
きハおかけ事とも
きりしてちくる名の
隠れなき世をいふ
せんとし本の歳き
ま月のまゝるふうへ
そくよめるなり
何しふき乃こや三ヶ
芦菁の小屋をそや
といひかけてそや三
らるくたしなんとし

なきなくちくる此月をこて
よめる　　橘後家女
いふかせんなけきの森ハ志げきまと
本乃アるれ月のかくれなき世を
掬ゆくる人乃久志う者も世さ
アくれハ法かりしくる
　　お所院肥後
かやイ
何しふき乃こや三ヶしつまなんん
かさしく人乃をとけまもせぬ
人のかりつかりくる
三乃心を読る　　左兵衛督実能

たる心ハ明し
我こひ乃おりふぞかわ乃いろに出て
我心の深きがとかの
名なれも出る物なるも
いますとも其深き心
をこそ知れん物をとこ
かとくきす雪ぬれ子
さけるまゝまて入さ
れを雪ぬのように
成しとよめわ我う
其あと小鳴く遠
郭公ハ志すとの
心なるへし
あの上にふる白雪れ
心ハ明なるやし序

我こひ乃おりふぞかわ乃いろに出て
いとくこと人かりしまし
ことろともに郭公を待なるにさけるる
なすをそく入ふくるは鳴つやなと
郭公の鳴つるとこそ人の
なるを叩て読る　春宮大夫公實
かとくきす雪井乃ように成しかハ
わまてうなこわ乃えよなかまし
めしイ
冬盆といてるすと
　　菅原成通朝臣
あの乃上にふる志て雪の頭もなく
おもハイ

哥也

まし人乃おわかう
結日ゆる君が元ゆく
月ゆく何ハ我こ
ゆる洞乃袖の露ハ
有る新をしかるる
へきを新も見ぬて
とて歎く也
何ゆるもなきさハ
逢るもなきとう
へて序奇よりわり

きしやしるまし人乃つらさは
多河といつるわらハをよひ浪かりしる
アたるまこしさわかれハ月のおかる里
なるよくめる　推僧正永縁
まし人乃おかうわらる月なしも
ぬるしこゝとかり新も見ぬくおし
寄水鳥恋　拵政左大臣
あふすもなきさにおさる芦鴨の
うきねをなくと人しるしめや
人を恨て待る國經母　荻原國經母

さの子やハわり身ハ
人乃つきも我身ハ
程乃うき故とせひな
しく恨ハよ人をか
こそぞなしきれとも
何まわにつゝき人ゑれ
ハさのと人を恨すやハ
何るへきとの心也
なかしてるなりての
何波と滿八代常陸
こゝ逢ひてと名は
立濱ハ無も見るめ
をかつくと人は逢見
あるのをうへてこ
いま人乃こころを

さの子やもわり身乃うきはなし果て
人乃浪しさをうし子ざるへき
拵政左大臣家にて恋乃心をよ
める　源雅光
なかしてるなりて乃滿の塩しかと
見るめもかつくあとこうきけ
うらめき人乃何るにつけて苦也
出るなりて　前ノ秋宮ノ甲斐
いま人乃こころをこそ乃山にてう
すきにしかしもおもひ出しらく

今つき人乃心を見る
まけて昔人のうきす
もなくなるしかの安
さをしひ出るとて人を
見るといひけすきこ
し小杉をうてて
めつらしやいそかに
三れし人乃れとく
しひ出く喜づれする
をなうしくよめり
三ヶ大和杉は笠ニ
山里乃しひけひは
山里は覚ハ何れハ
しひけひとうて
しひけくも人乃と

わしれる人乃おりひ出てをと
つまてる小詩る 橘後宗女
めつらしやいそかにとむわけれ
いくせをすきくおりひいつらん
皇后宮まゝ山里慈といつるすを
よめる 左京大夫経忠
山里乃おりひけひは法くおて
とくるころのかなけなるか那
山乃帰会は慈乃心をよめる
よみ人しらす

けくさきとかけひの法
らうとうてよめり
なるさかりけひ和を
逢は夏のやまかすか
まく慈は現なく平
生なるとしを幽遠
法うなも 法やまかと
と逢をぬさきは逢
ひしと人のいひしと
こひわかるきみり
心明と
よも乃海乃うらく
何さるは常と聞く
ことにとむまも生
る見へと見出ぬさ

なるはかり何ふ夏ハ夏乃こちらく
こひしをなとのうつなるしん
いかてかとおりふ人乃法も何ぬさき
に法うなと人乃中なれハよめる
中原章経
こひまふるきみりなふてふ云れ
いつくわ法へうきしかわかる
伊賀少将かことへ法かりしなる
お中納と資仲
よも乃海のうしくことにおされ

伊賀が脇に垂てくこう
生クひも何也何ゝねを
クひ垂にかやぶさ面く
きくも垂ね何やまと
面さクに波のさら
面く立よりひよ
あ人にハ見ゆへく侍
らすこの心
このとこう思へハいそね
宮代森紀伊也思ハ
物とこうはんね洞を
思ひあ刃わてもり
出るとて

何やしく見てぬいけるかひかる
あし
伊賀が脇 縫殿殿母女 後於上臈女房

面さクに波乃こちよりこくそ
系乃見るめ此クひかゝる
思ふ乃心を清る源親房 陸奥守健房子 本名殿康 [illegible]

このとこう思へハいそね(ねイ)いそしろ乃
もしまの千ゑるわかなそさかる
物おもひ侍なる比月乃あかて里
なる夜あかさかし 伊常よりも
堪りてて清る 楊侯家女

清しくとおもひう
いく月ハいく夜の月
乃こゝろかるやし
あさましや年ふ
心かろくハかろくくハ
我なりしかりハね夏と
かくうき思りつゝて
洞りうかふ男と我
ハ清かしとこかろき
物ハうかふゆへ
すまのひこう こうハ
殿をしけふ心を源氏
夕乾坤に太近の君こ
うとあり
名きくよりかねくも

清しくこおもひういつる千人を
何ゝくいく月あかけしつん
こハ志くも 上総侍従

あさましや年ふ
こゝろかろくハおもひさかしを
物ハまのりなる名ふもしき物の
何ひとりなるをとハせんれハ上臈門
院に侍るすまのひ(ひイ)こうとなん中とひ
なるを時て清る 源縁法師 後拾遺 [illegible]
名きくよりかねくもうつる心の邪

すまひとりふかをづ
よわかわくあはれ
しき心のうつるとて相
撲ハ合すといふなる
へし
こひとひとくさしき
心ハ明るもし

いかあしくかハあふへかるしん
　　恋乃心をよめる　民部卿忠教　京極関白子　歌を拝れ

こひとひとくさしぬ
むかしきさし乃中とあるしん
　　女乃ことへ作かりしかる

大納言經信

所ふすハいつともなく
しらぬ命とハあす
をも しらすたかる
きすをとゆ

所ふすをいつともなくてあはれわか
しらぬいのちかりとしをふるかな
所ふる所ふく女房乃あかき髪と
うち出しくこ世をれハよめる

ひと志れとなりふ心を
髪を部とうつく神
何ふれくるをしぬる
こゝろハ我心中乃会
敵をかくへくとも
人志れぬ事ひあり
有磯浦八代が越中
こゝろなりひありとうへ
ことなのよるを敵と
いひかけて人志れぬ
志ひありよるこゝろハ
ちかりしれとの心
をとゝかきくさしの
高師濱ハ代が桜井
通和泉ニ云音云語

菅原朝綱朝臣

ひと志れとなりふこゝろをかくへなん
かけあらはれくるをしぬとなくそ
　　博河院御時粉書合りよめる

中納言信忠

人志れぬなりひあるとうしかせ
なみ乃よるこゝろハしかれ
　　あし

一文紀伊

をとりきくさしれを用れ所ハ
かけしや神乃ぬれもこゝろすれ

我身のみなりしとて
古今 何のさはりぞ袖の中
まで入ぬれど我ぬれぬ
乃なきぞうらする
冬乃よれ雪けのうち
[illegible]
と我けなりあれは
[illegible]ねは亀のこうり
しとけるもはるとし
かすとして
ゆく心なくかきこそる
ひきまゆ入のこと[illegible]
ゆき屑れかくみこそる
とよめりけるを系を
[illegible]

新とりかへりをとりやはせし
すすけるを[illegible]せぬ意といへることを
よめる　お兩院六条
ゆく心なくかきことるみてひきまゆの
いとふことろ乃みとしきしあり
世をけんかきりはわすれしきあり
しかるる人乃心きりとも世きり
くれはよめる　よすひとしらす
人はいさけるまりやすんわすれて
とまれぬ身こそなきこちすすき

す筋をふかて我を
いとふ心を知てとして
人はいさけりやすんん
世きぬは世をきやすん
なきさやけん人のす
はしすとしれぬ身を
先生心ちもせすとして
なこそすきふ事をそ
勿来とは[illegible]常の
[illegible]
[illegible]
せきは陸奥をけり
たやくとりけさき心を
たやくとりは[illegible]
心はこそはすはなく

岩関意をよめる　源後撰朝臣
なこそすてふ事をはきすすことくさを
せきは乃名そともおりひろるかる
としこそ[illegible]人乃[illegible]
けしきさりしれは[illegible]
よすん人きしらす
たやくとりけさきこそをしてしかる
はりひこそ[illegible]山川乃あ
[illegible]
[illegible]谷川乃うとれあ

よりすゑの心とゝゆゑ
川の孫流く心頭と
とゝきりや細谷川の
面乾ふ尺しぬ人を
かゝ意よ流むとゝ
しきゝさりやとりふす
を細谷河の孫流とゝ
きみこうハひとよめ
太白神 和名ヒトヒメクリカミ
屋葉花と一夜めぐり此神
とも云り君とゝ心かゝ
通ふ方かゝて一夜め
ぐり乃神と呼及へ何と
て方違ハ志すゝと
大和物語あつるのゝハ

かけさふ尺しぬこひり志川むさ
男乃名ふハ天一神太白神のゆきなるゆゑにゆゑてことなるゆゑ
かゝ多のへ抽へまゐると
いゝ世侍れハ流かりしなる
きみこうハひとよめぐり乃神ときけ
あふ何ゆゑす乃かゝ多ふしん
後鄭燕乃心を　菅原朋輔朝臣
何つさらかつるよりこれなりひりハ
ひきくしふへきこと乃なきかな
人乃をとりせめて恨みて袖ぬらと
さ面をゝんせをやをといゝせさりなれハ

さのこうふ多りん一夜
めぐりの君となれるハ
あつさらかつる何しの
梓弓ハ鳴る乃枕詞と
引くふへきしを縁と
うしむとも尺るめも
ことひ恨るともまゝて
ましきよ何袖ぬらす
んとの心を浦乃海松
和布海士をかゝへて
こひしさを殊志ゝ
山里なとの様なれて
古への事を立るさ通
うしむなよ新しきを
かゝりけなる心さしなる

よめる　　皇后宮少將
うしむとも尺るめも何しし抽ゆへり
あふのを何まれ袖ぬらすしん
様なる燕といへることをよめる
　　修理大夫顕季
こひしさをいも志るしめや様ねて
やまゝ乃志つくり袖ぬらすとハ
人乃多くさまりてこんとゆゑ
なれハよめる　一家紀伊
うしむなよ新しきを月夜

人をまちくらんとしたれ
ぬ身なれハ此夕ハ来て
あひすとも恨なとこそ
新見てくらさ有
我ハおもひわけなり
然なといはんとそこ
三日月乃おもひわけ
おもひわけなるぬハ大
くさなるぬとわれて
うハわりなくてうこ
崇徳院乃わまて来
ると読せまゝと同心
たりこなりすこ一般わ
ことなく内を退出して
まゝかりしとこ

おもひわけなるぬ雲のまゝ月ハ
花人まくらくなる比内をわかるくい
てゝ女乃ことゝりまゝわてよめる
菅原永實

三日月乃おもひわけなるぬ恋しさに
われたくういつる雲乃うへよりも
周防内侍さしくなりて後ゆめく
此るをしすなとゆくれハよめる
源信宗朝臣

何そぬ我ハまとろむなとのなるハこう

何そぬ我ハまとろむ
逢ぬ我ハ何もいれね
ハ宮人もしぬ物をいの
てゆめりもしぬまと人
もかくらんとこ
人しれとなきなるハ
なきなるハこちく道
けまとおもしくなこ
とりなりうまりらん
かく神もなさねと独
ねのりとハ我ぬるこ人
しれとも我なるまとこ
何ちきなくるゝる月
逢ぬりしりとをあら
きなく只なるとこ

ゆめりもしぬまと人りなくらめ
なき名くりといつるすをよめる
左京大夫經忠

人しれとなきなるハ
なきなるハこちく道
けまとおもしくなこ
とりなりうまりらん
かく神もなさねと独
ねのりとハ我ぬるこ人
しれとも我なるまとこ
何ちきなくるゝる月
逢ぬりしりとをあら
きなく只なるとこ

人しれとなきなるハ
かさねぬ神をなをうこ霧なき
人を恨て清る
大中臣輔弘女

何ちきなくるゝる月
あひ見しりとをへるりとおもへ
こ井寺まゝ人こ恋哥よみけ
るかよめる
僧都公園 中納言經家子 母二条関白女

はるのはしめにかれいひ山ハ餉山飯乃鐘なるか人と寝ころと見ゆ
る野にをはそて
あすまたのほりのよ
交野ハ鵲の橋も
遠寧のうくあるを
他のかたのわかれと
逢こといふかやなる
年のへぬとそて
扇ハさすと云ハ逢す
はなきゆかりさする
に枕もやすとうけて
年ふる秘きあるそ
かしの山の下ゆく

はるのはしめとはいはるるかれいひ山
きのふはこえしかり人とねてまし
あすもまたのほりのよいまはあかねれを
なにはかとのみゆくまやなかるまん
逢ことはあやふる屋乃板ひさし
さすうりかけて年乃へぬらん
かしの山乃下ゆくされ水
はるまはおもひこころあまり
ねもと人とはいをこそりよ中はよ
君ところをとわりきれて

はるまての吉代の世
きみと序すよみかう
あこかや心をそなへよ
のまハあるみや我に
とふ心ある飛をとし
ねもと人とはそてにと
心ハ明し一首中推説
そるるしこやぬるん
見れはよわる人なき
とのまへと見あるる
を服黒限りなりとし
はふこころを石神乃
石神は和るるかはさよ
分のき動とし動への様
ますかるね身をうらはし

そむかすしこやぬる人乃おもかげぞ
はかなきころ乃まことの心や
寄石恋といへることをよめる
お安院六条
はふこころをよふ石神乃つまとなに
わかこころのみうこきぬるかな
摂政左大臣家にて恋乃心をよ
める
源雅光
かすかなるね身をうちはの乃ちくと
いくれなのしをこひわたるかな